

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19791724
 研究課題名（和文） 急性白血病患者の希望を支える看護師の関わり方
 研究課題名（英文） Nursing approach to sustain hope in acute leukemia patient.
 研究代表者
 永田 暢子（NAGATA NOBUKO）
 埼玉医科大学・保健医療学部・助教
 研究者番号：10438856

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、急性白血病患者の抱く希望の内容、希望に作用する要因および希望を支える看護師の関わり方を明らかにすることである。初発の急性白血病患者に対して半構成的質問紙を用いた面接調査を行った。急性白血病患者にとって重要な希望は病気の治癒であった。患者は不安を抱えつつも治療を重ねることで自分なりの対処方法を獲得し、治癒へ向かっていることを実感していた。看護師は、患者が安楽に治療を受けられるよう環境調整を行う必要がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the hopes held by acute leukemia patients, the factors that act in those hopes, and how nurses can be involved to support those hopes. An interview survey of acute leukemia patients was conducted using a semi-structured questionnaire. The major hope of acute leukemia patients was to be cured of their disease. As treatment continued they acquired their own coping strategy even while experiencing anxiety, and felt they were moving toward a cure. For nurses it is necessary to create an environment so that patients can undergo treatment in comfort.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	0	1,400,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,100,000	510,000	3,610,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：急性白血病、希望、がん看護、グラウンデッド・セオリー・アプローチ法、質的研究

1. 研究開始当初の背景

急性白血病と告げられた患者は、罹患のショックを受けとめる間もなく治療を受けなければならない。さらに、強い副作用症状を伴う治療が年余に及び、患者は精神的・身体

的苦痛を長期間に亘り強いられる。このような状況でも、患者が希望を持ちつつ療養生活に臨むことができれば、病気と向き合い、療養過程での困難に立ち向かう力を得ることができると思う。

研究者は平成 17～18 年に、寛解導入療法を受ける急性白血病患者の希望と希望を支える看護師の関わりについての調査を行った。その結果、患者にとって希望の根幹を成すのは病気の治癒への希望であり、生への希求であった。また、看護師による安心して治療を受けられる環境の提供、患者にニーズに合わせた情報提供などの関わりは、患者が希望を見出し、維持することを支えることが明らかとなった。

しかし、寛解導入療法時に抱かれた希望は入院初期のものであり、時間や状況によりダイナミックに変化するという希望の属性によれば、その後の療養過程においても希望は変化すると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、寛解導入療法、地固め・強化療法を受ける急性白血病患者の抱く希望、希望に作用する要因および希望を支える看護師の関わり方を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

研究対象者は血液内科病棟に入院中で初発の急性白血病に対して寛解導入療法、地固め・強化治療を受けている、病名、治療法などの説明を主治医からされている、意識が清明でコミュニケーションが可能である、以上の条件を全て満たし、20 歳以上で本研究の目的を説明し、同意が得られた患者とした。また、研究の実施に際し、主治医・病棟師長の許可の得られた患者とした。

(2) 調査場所

地域がん診療連携拠点病院 血液内科

(3) 調査期間

平成 20 年 12 月～平成 22 年 1 月

(4) 調査内容

調査内容は療養生活を送るなかで病気と闘う力や支えになっていること・物・人間関係などである。

(5) 調査方法

面接調査法：寛解導入療法後から退院までの治療終了後ごとに、心身の安定している時期に半構成的質問紙を用いた面接調査を行った。面接場所はプライバシーの保護ができる環境を確保した。面接内容は、患者の許可を得て録音し、面接終了後逐語録を作成する。逐語録作成後、録音した面接内容は直ちに消去した。面接時間は患者に負担をかけず、治療や生活に支障をきたさない時間帯で原則的に 30 分程度とした。

(6) 分析方法

分析は Strauss と Corbin における実証的帰納的分析方法であるグラウンデッド・セオリーアプローチ法によって行った。

(7) 倫理的配慮

対象者へは文書と口頭にて、研究テーマ、研究目的・意義、研究方法、研究期間、研究参加は自由意志であること、本研究は診療や看護とは一切関係なく、研究参加を断っても不利益は生じないこと、研究参加同意後、対象者の都合が悪くなった時にはいつでも中断可能であることを説明し、同意書にて承諾を得た。

4. 研究成果

対象者は 6 名であり、女性 4 名、男性 2 名、年齢は 21 歳から 66 歳であった。病名は急性前骨髄性白血病 3 名、急性骨髄性白血病 3 名であった。面接回数は 1 人 2 回から 4 回であった。

(1) 急性白血病患者の抱く希望の内容

急性白血病患者の抱く希望は、＜病気の治癒＞＜治癒を信じる気持ち＞＜病気になる前の生活への復帰＞＜病気と闘う力を与えてくれる人々の存在＞＜退院後の目標＞の 5 つのカテゴリであった。

＜病気の治癒＞は治療を受けることで急性白血病を治したいという気持ちを示している。

＜治癒を信じる気持ち＞は、治癒するかはわからないが、とにかく急性白血病が治ることを信じる自身の気持ちを示している。

＜病気になる前の生活への復帰＞は、健康なころに送っていた生活に戻り、病気をしなかったかのような生活を送りたいという気持ちを示す。

＜病気と闘う力を与えてくれる人々の存在＞は、子どもや家族や友人といった心配してくれる人々の存在が患者に力を与えていたことを示す。

＜退院後の目標＞は、仕事に復帰することや夢の実現といった、退院後に実現したい目標を持つことで治療を乗り越えようとすることを示す。

(2) 急性白血病患者の希望に作用する要因

希望に作用する要因は〔副作用症状〕〔経験による知識の獲得〕〔治療期間の長さ〕〔同室者同士の助け合い〕〔治療の順調な経過〕〔再発への恐れ〕〔退院後の生活への不安〕〔安楽に過ごせる環境〕〔必要な情報〕の 9 つのカテゴリであった。

〔副作用症状〕は、治療の副作用により発熱や腹痛など心身ともに辛い時期であることを示す。また治療を繰り返すことで、骨髄抑制の期間が長引き、不安や焦りを感じていたことを示す。一方で副作用症状が改善し、体調の回復の実感や次の治療へ進めるうれしさを感じていた。

〔経験による知識の獲得〕は、治療を経験

することで、おおよその治療経過がわかり、副作用症状を予測でき、自分なりの副作用症状の対処の仕方を獲得していくことを示す。〔経験による知識の獲得〕により、次の治療も乗り越えていけるという自信となっていた。

〔治療期間の長さ〕は、入院時に半年間の治療期間を告げられ、その長さに先行きの見えない不安を抱いていた。〔治療期間の長さ〕を実感することで、希望を実現できるのだろうかという不安を抱いていた。

〔同室者同士の助け合い〕は、同室者と副作用への対処方法について教えあうことや明るい雰囲気を作ることで、互いに励ましあうことを示す。同じ体験をしている同室者の存在により、辛いのは自分だけではないと感じることで、辛い時期を乗り越えていた。

〔治療の順調な経過〕は、医師の説明通りに治療が進んでいることや、副作用が出現することで順調に治療を受けられていると実感していることを示す。〔治療の順調な経過〕は確実に治療が進んでいることで、退院へ向かっていることを実感できていた。

〔再発への恐れ〕は、治癒のために治療を行っているが、退院後にいつかは再発してしまうのではないかという不安を示す。〔再発への恐れ〕は退院や治療の終了が近づいてきた時期に現れていた。

〔退院後の生活への不安〕は、退院後は入院時のように頻回に採血を行わないため、自分の状態が把握できないこと、仕事復帰のタイミングや食生活などの日常生活を送る上での注意点がわからないことに対する不安を示す。退院はうれしいことであるが、退院後の生活がイメージできないことで不安を生じていた。

〔安楽に過ごせる環境〕は、治療を行うにあたって、治療に集中することができ、辛いときでも無理をせずに安心して過ごせる環境を示す。

〔必要な情報〕は、治療や薬の副作用症状など、必要で知りたいと思った情報が得られることを示す。これにより、今後の経過がわかり見通しが立つことで安心していた。

(3) 急性白血病患者の希望を支える看護師の関わり方

希望を支える看護師の関わり方は〔辛さを理解した対応〕〔具体的な情報提供〕〔病気を感じさせない声かけ〕〔安楽な環境の提供〕の4つのカテゴリがであった。

〔辛さを理解した対応〕は、副作用症状が強く出ているときや気持ちが落ち込んでいる時期に、看護師の細やかな配慮にいたわりの気持ちを感じていた。また、副作用症状を我慢している患者へ、我慢しなくてよいと声をかけることで、患者はリラックスすることが

できていた。看護師の〔辛さを理解した対応〕は、〔副作用症状〕が強く出ている時期の患者にとって、自分の気持ちを理解し受け止めてくれたと感じる関わりであった。

〔具体的な情報提供〕は、医師による説明ではわからなかった部分を噛み砕いてわかりやすく説明してくれたり、血液データについて具体的に説明してくれたりといった、治療や病気についての具体的な情報提供を示している。患者が欲している〔必要な情報〕を具体的に提供することで、患者は、今後の見通しと立てることにつながっていた。

〔病気を感じさせない声かけ〕は、看護師が明るい表情で治療や病気に関係ない話をするすることで、患者は気持ちが明るくなり、病気を意識せず過ごすことができていた。

〔安楽な環境の提供〕は、治療による〔副作用症状〕が強く出づらいつらい時期に、より安楽に過ごせるよう病室を変更するなどの環境調整をおこなっていた。〔安楽に過ごせる環境〕を提供することは、患者が治療だけに専念できる環境をつくることにつながっていた。

(4) 急性白血病患者の抱く希望と希望を支える看護師の関わり方

急性白血病患者にとって<病気の治癒>は“生きる”ことにつながっており、生きたいという強い思いを示す。これは希望の中心となるカテゴリであると考え。また、<病気の治癒>とともに、患者自身が<治癒を信じる気持ち>を持つことは、病気や治療を乗り越えようという急性白血病患者の信念であると考え。急性白血病患者の治療は地固め療法が終了するまでにおよそ半年を必要とする。その長い入院期間の中で、治るといふ思いと再発するのではないかという恐怖が共存していると考え。〔治療期間の長さ〕により、患者が〔再発への恐れ〕を感じ、希望は弱められるといえる。さらに、〔副作用症状〕が強く出るとは、患者にとってつらい時期であり、希望は弱められると考え。しかし、そのなかでも〔副作用症状〕が改善し、体調の回復を感じることができれば〔治療の順調な経過〕を実感することにつながると考える。看護師は患者が副作用症状の回復を実感できるよう声かけを行う必要があるといえる。また、〔経験による知識の獲得〕が患者の自信となるよう、患者が行っていることを認めることで希望は維持され、支えられると考える。

急性白血病患者にとって、<病気と闘う力を与えてくれる人々の存在>があることで、それが気持ちを前向きにしてくれる力の源となっていた。希望が弱められてしまったときでも、<病気と闘う力を与えてくれる人々の存在>により、自分自身を奮い立たせるこ

とができると考える。また、患者は周囲の人々の存在があることで自分は治療に専念できるのだと感謝の気持ちを持っていた。急性白血病の罹患は患者にとっては、自分の生を脅かす危機的なことであるが、それによって、周囲の人々への感謝や自分の置かれている状況を振り返ることで、自己の成長につながっていると考える。

<病気になる前の生活への復帰>を願う患者にとって、〔退院後の生活への不安〕は元の生活にもどれるのかといった不安を引き起こし、希望を弱めたと考える。看護師が〔具体的な情報提供〕をすることは、患者の不安を軽減させ希望を維持するといえる。また、患者にとって〔副作用症状〕が強く辛い時期には、希望を抱くことや、抱いている希望を意識することは難しいと考える。看護師は〔辛さを理解した対応〕〔安楽な環境の提供〕を提供することで、患者が少しでも〔安楽に過ごせる環境〕をつくることが重要であるといえる。さらに、〔具体的な情報提供〕をすることで患者にどのくらい回復してくるかといった見通しをもてるように関わることも間接的であるが希望を支える関わりとなるといえる。

急性白血病患者にとって〔同室者同士の助け合い〕は、辛いのは自分だけではないと感じることにつながり、辛い時期を乗り越えることができていた。急性白血病患者は、骨髄抑制が強いことから、感染予防のために個室や多人床であってもカーテンで仕切った環境で過ごすことが多い。そのような環境は、患者に孤独感を与えることもあると考える。看護師は、他者の存在を伝えることでも急性白血病患者を支える関わりになると考える。

本研究において、希望が変化する過程は認められなかった。しかし、<病気の治癒><治癒を信じる気持ち><病気になる前の生活への復帰><病気と闘う力を与えてくれる人々の存在>は入院時から治療が終了するまで抱かれた希望であり、<退院後の目標>は退院が近づくにつれて抱かれた希望である。<退院後の目標>が抱かれた時期に、〔再発への恐れ〕〔退院後の生活への不安〕といった要因が出てきているように、治療の経過時期や希望に作用する要因によっても希望は見出されたり、弱まったり、支えられたりする。<退院後の目標>に対して看護師は、その恐れや不安を軽減できるような〔必要な情報〕を提供するとともに、不安があることを理解した関わりが必要であると考え。治療経過によって抱かれる希望があるとともに、その希望に作用している要因が何かを把握し、その要因に向けての看護をすることも希望が支えられると考える。

5. 主な発表論文等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永田 暢子 (NAGATA NOBUKO)

埼玉医科大学・保健医療学部・助教

研究者番号：10438856

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし